

藤野裕子『都市と暴動の民衆史—東京・1905-1923年』（有志舎、2015年）要旨

本書は、日比谷焼打事件や米騒動など、1900～10年代の東京に現れた大規模な都市暴動を主たる分析の対象とし、暴動の特徴やその発生要因、および一連の暴動が1920年代に終息する要因を、民衆史の視点から考察したものである。これにより、民衆の暴力を生みだし、かつその暴力によって再編成が迫られた近代日本社会のダイナミズムを描き出すとともに、そのプロセスに内包された問題系を明らかにすることを目指した。

従来の研究では、これらの都市暴動を「大正デモクラシー」の出発点と位置づけ、1920年代に隆盛する労働運動・普選運動へと単線的に発展するものと捉えてきた。これに対し本書では、暴動における民衆の行動形態や意識を詳細に分析すること（第1・7章）、当該期の政治集会の特徴や1920年代の普選運動における性質変化を明らかにすること（第3・4章）、民衆の日常的生活実践と非日常的な暴動との連関を、ジェンダー的な視点も含めて検討すること（第5・6章）、関東大震災時の朝鮮人虐殺（1923年）と都市暴動との共通性や差異を検討すること（第8章）により、従来の発展史観とは異なる民衆像・時代像を提示することを試みた。

暴動の主たる担い手であった若年の男性労働者は、社会上昇が困難な状況にあつて、強烈な疎外感や承認願望を有しており、腕力の強さ、身体的な強靭さ、義侠心といった「男らしさ」を基軸とする独自の価値体系を形成していた。一連の都市暴動は、屋外政治集会によって群衆状態がつくられ、警察と民衆の権力関係が揺らいだ瞬間に、日常的に鬱積した男性労働者の疎外感や承認願望が暴力となって発露したものと見える。1920年代の普選運動や労働運動は、男性労働者の政治上・生活上のふるまいを規律化・秩序化するとともに、彼らの文化的な一体性を解体・分断する作用があつた。その意味で、1920年代は都市暴動の時期からの連続というよりも、民衆の暴力をめぐって社会秩序が大きく転換し、再編成された時期と捉えられる。しかしそうした秩序化はあくまで表層的なものに過ぎず、暴動の根源的な要因であつた社会的な序列・格差は維持された。そうして潜在化した民衆の暴力性は、関東大震災時の朝鮮人虐殺のように、国家が民衆の暴力行使を正当化した際に、東アジアの他民族へと向けられていくことになる。

藤野裕子氏 略歴

1976年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。ハーバード大学客員研究員、早稲田大学文学学術院助手、同助教を経て、現在、東京女子大学現代教養学部准教授。